

青年期の自我の構造

—レインの相互人格論をとおして—

堤 雅 雄*

Masao TSUTSUMI

The Structure of Ego in Adolescence
—from the View of Interpersonality in Laing—

I 序

人は生誕後しばらくの時期を、その環界との一体感の中に生きる。すべては「自己」^{わたくし}であって、同時に「自己」^{わたくし}は何ものでもない。幼児の幻想の中では、子は母であり、母は子である。彼らにとっての至福の時とは、この自我未分化な忘我（ecstasy）の状態のことである。そして以後の人生とは、ある意味でこのカオスから自己が分化し、自律していく過程であり、また別の意味で、Freud, S.⁽¹⁾の説くように、この幼児期に失われた原初的自他融合状態への回帰の道、即ちエロス（性）を媒介とした「対の関係」の希求の道でもある。Freudの自我論では、しかしながら、この原初の自他融合の世界は必ずしも明示されているとは言えない。彼は自我発達の端初にまずナルチスム（自体愛）的段階を設定し、それに対して母（乳房）は志向される対象として現前してくる、という具合に、自体愛から対象愛（対象関係）へという過程の中で自我を記述している。このように、まず「自」があって、「他」はその対象として派生的に現れてくるという構図に、独在論的な超越論的自我による呪縛という、近代西欧理性に特有なある種の限界が見てとれる。

むしろ、原初に自他の融合的状態（森山のいう「原初的エロス状態」⁽²⁾）があり、そこからまずもって「自己ならざる者」が現れてくると考えた方がより自然である。しばしば指適されるように、「自己」はこの「非自己」の認識をまっけて、「非自己」からの逆照射によってはじめて現象するのである。

「自己ならざる者」として、原初のカオスからまずもって分化してくるのが自己の身体であり、そして母である。長ずるに従い、それは友となり、夫（妻）とな

り、そして我が子となる。このような家族を中心とした非自己、即ち他者の現前に向かって自己は現象してくる。和辻倫理学流に言うならば、人の人たるは、「人と人との間」においてである。この「自己と他者がともに主体として相互に関わり合うことによって成り立つ人『間』の『間』性のこと」を、宇都宮は「相互主体性」⁽³⁾と称し、Husserlの「相互（間）主観性」^{インテルズプェクティヴィテート}とは区別して用いている。

ここで、いわゆる「一般化された他者」として現れてくる「社会」は、前述の「家族」を中心として現れてくる他者とは位相を異にするものとして捉えなければならない。後者はより積極的に、「我」にとっての「汝」と呼ぶ存在であり、自己はこの汝との「対の関係」という、すぐれてエロスの関り合いを核に形成される。これに対して前者（社会）はより抽象的であり、しかも後者の家族を通してはじめて個人に現れてくるものであって、決してこの逆ではない。

このように、自己は他者との相関関係の中で形づくられていくのだが、この他者は発達の過程で次第に自己の内部に沈殿していき、自我の重層構造を構成していく。こどもは母に代表される他者のまなざしの中で「よい子」であろうとするし、「ただの子」であろうとする。そうして一人前の「おとな」への道をたどっていくのである。自己はひとたび他者を通して対象化（外化）されたのち、その他者の規定性のもとに再内在化されて自己のペルソナ（パーソナリティ）となる。

こうして、他者のまなざしを通して対象化された自己、他者を媒介として成立する自己は、必然的にその内に「他者化（他有化）」⁽⁴⁾（alteration）、「疎外」（aliénation）⁽⁵⁾という契期を孕んでくる。Laing, R. D.,⁽⁶⁾（1967）は現代人の疎外を次のように描いている。

「他者が私たちの心の中にはいりこんでそれを支配す

* 島根大学教育学部心理学研究室

るようになってしまいました。そして私たちはそういった他者をわれわれ自身と呼んでいるのです。すべての人が自分自身に対しても他者に対しても違和感を感じるようになり……、全くばらばらの人間同士になってしまったために、他者の中に自己を認めるということもなく、自己の中に他者を認めるということもありません。したがって、ここには二重の不在があることになる……。」
(傍点筆者)

この他者化された自己以外に本来の自己があるのか、この点について西欧の理性は「神の前のわたし」を挙げて激しく抵抗するが、坂部はこの点についてはっきりと言いきっている。

「わたしの素顔もまた、わたしにとって、他者（ないしは<他者の他者>）以外のものではなく、他者性につきまといわれることのない純粋な自己……などというものは、本来、どこにも存在しない。」

この「他者化」の最も端的なあらわれが、「狂気」の中での「離人症 (depersonalization)」と呼ばれる症状である。そこでは、それまでの自己はもはや自己でなくなり、他者はよそよそしく「他人」となる。そして自己のパーソナリティもペルソナ（仮面）として解離していく。こうして世界は一切の生気を失って、単なるものとしてのみ現れる。

このような心的現象は必ずしも特殊に「病」者だけのものではない。仮にここで「私とは何か」と自問してみよう。「わたしは、（子にとっては）やさしい父であり、（妻にとっては）頼もしい夫であり、（会社にとっては）勤勉なサラリーマンであり、（国家にとっては）善良な小市民であり……。」この様々な述語が全て、ふとした折にわたし自身にとって意味の無いもの、よそよそしいものとなって感じられる瞬間を経験したことのない者が果しているだろうか。むしろこのような経験こそ、与えられた生に飽き足らず、真に生きようとすることの証しであり、少なくとも惰性的、機械的な生では決して味わえないものである。

以上のような自他の相関性、相互性を、豊富な臨床的実践の中から「狂気」を問い続けてきた Laing の自己論の中で見ていきたい。

II Laing の自己論と IPM.

イギリスの精神医学者 Laing は、Feuerbach, L., や Buber, M. の哲学をもとに、Freud 流の超意識心理学が人間存在を捉えるに自我 (I) の周囲をめぐるのみで、他我 (You) の存在を見る眼を欠落させてきたことをまづもって指摘する。人は我と汝の相互人格の関係

(interpersonal relation) の中ではじめて人たりうる。人間存在を「皮膚をまとった自我」として個体的に捉えるのではなく、二者関係の中での相互作用 (interaction) と相互経験 (interexperience) という概念⁽⁹⁾をもって彼は記述していこうとした (Laing, 1966)。

互いに投げかけ合い、互いに受けとめあう、その行為とその経験が相互に通じあえるものとなれば、それらは個体を超えた共有状況 (common situation) となる。この相互的応答性のうちではじめて「我と汝」の関係は成立する。しかしながら、互いの行為、互いの経験の間に誤解が生じ、裂け目が開くこともある。わたしにしか解りえぬわたし (self identity) と、あなたから見られているであろうわたし (meta identity) との間に乖離が生じてくる。このような関係が進んでくると、他者の存在自体が次第に自己のアイデンティティにとっての脅威となってくる。わたしが他者のまなざしに呑み込まれ、侵されてしまうのではという「存在論的不安」から自己を防衛しようとする。その方法には2つある。1つは自己を空虚化し無化することであり、いま1つは他者を石化し、無効化することである (Laing, 1960)。

こうして自他の関係は、「我—汝」の関係から、「我—それ」の関係に転化していく。Laing にとっての「分裂病質者 (schizoid)」とは、それまで演じてきた他者から期待される役割、即ち「いい子」、「ただの子」であることに対する不安と恐怖から、外化された自己と、それを強いる他者の双方を無に化するため、虚しい戦いを続けている者たちである。換言すれば、Laing にとっての「病者」とは、自己と他者の分裂の中で、そして「偽りの自己」と「真の自己」とに引き裂かれた自己の自覚から、新しい自己の再生を求めて険しい旅路を歩む旅人のことである。

具体的な二者関係の中での、自他の相関性を対象化し、記述するために、Laing が用いた方法が IPM (Interpersonal Perception Method) である。この IPM の記号法は、「相互人格の知覚」(1966) の中で次のように展開されている。

ある事象 (X) についての夫 (H) の見解を H (X) と記し、これを直接的パースペクティブと呼ぶ。次に、X についての妻の見解 [W(X)] についての夫の推察を HW(X) と記し、メタパースペクティブと呼ぶ。更に X についての夫の見解に対する妻の推察 [WH(X)] についての夫の推察を HWH(X) と記し、メタメタパースペクティブと呼ぶ。理論的には、この論法は螺旋状に無限に続く幻想 (phantasy) の系を構成するのだが、ここでは一応上記の3段階までについて、二者の相互のパースペクティブを照合していく。以上を図式的に示せば次の

ようになる。

direct perspective ; H(X)W
meta perspective ; HW(X)HW
meta-meta perspective ; HWH(X)HWH

実際の設問は各々次のような形をとる。

「あなたはXについてどう思いますか。」

「あなたは、あなたの妻(夫)がXについてどう思っていると思いますか。」

「あなたは、あなたのXについての見解について、妻(夫)はどう思っていると思いますか。」

ここで、Xは全て夫と妻の関係性についての事象(例えば夫の妻への愛)である。質問紙は60事象に関する質問項目から成り、各々12の下位項目によって構成されている。個々の質問に対する回答を相互に照合することによって、次の3つの指標が求められる。

- ① 一致 (agreement or disagreement) ;
H(X)－W(X)
- ② 理解 (understanding or misunderstanding) ;
H(X)－WH(X), または W(X)－HW(X)
- ③ 実感 (realization or failure of realization) ;
HW(X)－HWH(X), または WH(X)－HWH(X)

これらの指標によって、二者間の共有状況が各々にいかなる経験として内在化されているか、及びその内在化された経験が相互にどれほどの食い違いを生じているかを見ることができる。

この方法は、Dymond, R. F., (1949)⁽¹⁾が、「自分自身の中に、他者の思考・感情などを移し入れること」即ち「共感性 (empathy)」の研究で用いた方法を基盤にして発展させたものようだが、Dymond の場合は小集団内での相互知覚を照合する際に、集団成員を全て等価な他者存在として処理しており、また Laing のシエマでのメタレベルまでの分析に留まっている。ここで1つ留意しておかなければならないのは、Dymond が他者知覚の正確さを共感能力として評価しているのに対し、Laing はこれを必ずしも適応的なものとしてはみなしていないということである。なんとすれば、彼のみるところ、例えば分裂病者は彼の家族よりずっと鋭敏に相手の気持ちを感じとっているはずであるからである。

今回の研究では、Laing らの I P M を下地にしながらも、次の点で変更を加えている。

- 1) 問われる事象は、自己の人格特性についてである。
- 2) ここでの他者は、あくまで自己の幻想系内での観念的存在であり、実際に他者が自己をどのように評価しているかについては問題としない。従ってここでは「共

感能力」については明らかにされない。(これは単に調査を行なう上での困難性からだけでなく、自己の幻想系に内在化された他者存在こそ、現実の他者存在以上にリアルな現前存在者であると思われるからである。)

以上の要領で作成された I P M 型の質問紙を用いて、人生の中では相対的に最も「分裂病質」的時期であると考えられる青年期の自我の幻想体系へのアプローチを試みてみたい。

III 方 法

1. 質問紙

<パースペクティブレベル> Laing らと同様と、3段階のパースペクティブレベルが設定される。

- ① Self Identity (S・I) レベル ; P→P
- ② Meta Identity (M・I) レベル ; P(O→P)
- ③ Meta-Meta Identity (M・M・I) レベル ; P・{O→(P→P)}

ここでPは自己、Oは他者のことである。

<特性> パーソナリティ特性を表わす形容詞としては、長島ら (1966, 1967)⁽²⁾の self differential の各因子より、適宜に次の4語が選ばれる。

「まじめな」、「明るい」、「やさしい」、「頼もしい」

<対象> M・I, M・M・I レベルにおいて想定される対象としては、青年期の自己にとって一般に最も重要な存在 (significant others) とされる次の3者が選ばれる。

「おかあさん」、「友達」、「先生」

以上の組合せによってできる実際の質問文は、例えば次のようなものとなる。

S・I ; 「あなたはあなた自身をまじめだと思えますか。」

M・I ; 「おかあさんは、あなたをまじめだと思っていますか。」

M・M・I ; 「おかあさんは、あなたが自分自身をまじめだと思っている、と思っていますか。」

こうして、S・I レベル4項目、M・I レベル及びM・M・I レベル各12項目、計28項目から成る質問紙が構成される。

2. 被験者

被験者は次のものから成る。

- 1) 中学生 (公立中学校3年生) ; 男子19名, 女子20名, 計39名。⁽³⁾
- 2) 高校生 (公立農林高校2年生) ; 男子14名, 女子25名, 計39名。
- 3) 大学生 (国立大学教育学部2回生) ; 男子9名,

女子25名, 計34名。

表1 S・Iレベルにおける各群の反応分布

(数値は人数)

		中学生			高校生			大学生		
		男 (19)	女 (20)	計 (39)	男 (14)	女 (25)	計 (39)	男 (9)	女 (25)	計 (34)
まじめさ	1	8	6	14	6	9	15	6	13	19
	0	2	6	8	4	5	9	1	5	6
	-1	9	8	17	4	11	15	2	7	9
明るさ	1	12	14	26	10	17	27	4	9	13
	0	2	3	5	2	5	7	1	6	7
	-1	5	3	8	2	3	5	4	10	14
やさしさ	1	9	12	21	10	7	17	6	12	18
	0	5	2	7	4	14	18	3	6	9
	-1	5	6	11	0	4	4	0	7	7
頼もしさ	1	5	5	10	1	6	7	0	2	2
	0	4	2	6	3	4	7	3	1	4
	-1	10	13	23	10	15	25	6	22	28

1; はい, 0; どちらともいえぬ, -1; いいえ

3. 手続き

被験者は、28項目の質問文に対し、「はい」、「どちらともいえない」、「いいえ」の3ポイントで回答することを要求される。この際に、できる限り「はい」か「いいえ」で答えるようにとの指示が付け加えられる。なお、率直な回答を期するため、性別、年齢以外には姓名等の記入は求められない。また、被験者には個別的な吟味のためIPM型質問紙と合わせてSCTも与えられたが、これについての分析は後の機会に譲りたい。

IV 結果

1. S・Iレベル(表1)

まず、現代の青年が自己をどのように評価しているのかを、S・Iレベルにおいてみる事ができる。

1) 性差を検討するには標本数が不足している。また

表2 中学生における2変数間の連関性(連関係数; C₁)

	S・I-M・I			S・I-M・M・I		
	母親	友達	先生	母親	友達	先生
まじめさ	.3995*	.4631***	.4211*	.4947***	.4694***	.3224
明るさ	.6244***	.4673***	.4765***	.5779***	.5779***	.5076***
やさしさ	.3755*	.4063*	.5020***	.3090	.4604***	.5602***
頼もしさ	.3641*	.4575***	.4981***	.3049	.3220	.4225**
平均	.4409	.4486	.4747	.4216	.4574	.4532

表3 高校生における2変数間の連関性(C₁)

	S・I-M・I			S・I-M・M・I		
	母親	友達	先生	母親	友達	先生
まじめさ	.3605*	.3548**	.2319	.3429	.5080***	.3041
明るさ	.4135***	.4841***	.4413***	.3173	.5585***	.2846
やさしさ	.3072	.4395***	.1931	.2691	.3765**	.2070
頼もしさ	.1646	.5273***	.3043	.2330	.4498***	.3274
平均	.3115	.4514	.2927	.2906	.4732	.2808

表4 大学生における2変数間の連関性(C₁)

	S・I-M・I			S・I-M・M・I		
	母親	友達	先生	母親	友達	先生
まじめさ	.2914	.4606***	.3975**	.4531***	.3965**	.3647
明るさ	.3689	.5848***	.6343***	.6740***	.5347***	.5138***
やさしさ	.3718	.5091***	.4113**	.3836**	.3731	.3138
頼もしさ	.3275	.4140*	.3407	.3945**	.4062**	.3578
平均	.3399	.4921	.4460	.4763	.4327	.3875

※-5%レベル, ※※-1%レベル, ※※※-0.1%レベル

近似的に χ^2 検定を行なってみても、性差が現れたのは高校生における「やさしさ」の項目のみであった。それ故ここでは性差は一応無視しうるものとみなし、特別には言及しないこととする。

2) 各特性間には、やや異なった傾向が見られる。

<まじめさ>; 中、高校生に比して大学生により肯定的な傾向が見られるが、群間の差は有意ではない。

<明るさ>; 大学生に比べて、中学生、高校生は共により肯定的である ($\chi^2_{中-大}=5.99$, $P=.05$, $\chi^2_{高-大}=8.86$, $P<.01$)。この傾向は前記のまじめさとは対照的である。

<やさしさ>; 各群とも肯定的傾向が見られる中で、高校生女子のみが異質で、中立的または懐疑的反応が大となっている。この為、高校生での性差、及び中学生と高校生間の反応分布に有意差が生じることとなった ($\chi^2_{中-高}=8.53$, $P<.01$)。

<頼もしさ>; 他の特性とは対照的に、ここではどの群でも否定的反応が大であるが、この傾向は大学生においてのみ有意なものとなっている。

全体としてみれば、「明るさ」と「やさしさ」で比較的肯定的であり、「頼もしさ」で否定的である。「まじめさ」はその中間に位置する。群間の比較では、「明るさ」の項目での大学生と、「やさしさ」の項目での高校生(女子)の反応分布が他に比べて異質である。

2. S・I と M・I, 及び S・I と M・M・I の間の連関性

ここでは、S・I と M・I, S・I と M・M・I という2変数間の連関性(独立性)を、連関係数を指標として見ていくことにする。

1) 中学生(表2)

<S・I—M・I>; すべての項目で有意な連関性を示す。この傾向は他の2つの年長者群に比べて、母親と先生の両項目で対照的である。

<S・I—M・M・I>; ここでも連関性は他群に比してやや高い。2変数が互いに独立とみなせるのは12項目中4項目である。特性別にみれば、S・I レベルで最も肯定的であった明るさの項目が、ここでも一貫して高い連関性を示し、一方 S・I レベルで比較的否定的傾向を示した頼もしさの項目は、相対的に低い連関性を示しているのが目につく。

2) 高校生(表3)

<S・I—M・I>; 中学生に比べ、友人の項目は相変らず高い連関性を示しているが、母親と先生の項目で独立なものが増している。この対象間の分化は次のM・M レベルでより顕著となっている。

<S・I—M・M・I>; ここでは、母親と先生の項目はすべて独立となっている。明るさに関しても例外ではない。これに対して友達項目は相変らず有意な連関性を示している。

3) 大学生(表4)

<S・I—M・I>; ここでも対象間の分化は現われてきている。中学、高校生と同様に、友達項目は未だに有意な連関性を示しているが、母親の項目はすべてが独立となっている。しかしながら、先生の項目は再び連関性が高くなってきている。

<S・I—M・M・I>; ここでは母親と先生の項目で、上記のS・I—M・I 関係とは対照的な傾向がみられる。母親の4項目はすべて有意な連関性を示しているのに対して、先生の項目は独立性を増してきている。

この他に、全体を通して比較的一貫してみられる傾向としては、次のことが挙げられる。

① 年齢; 中学生群は、高校・大学生群に比べて独立性が低い(24項目中20項目で有意)。

② 対象; 想定する対象別では、友達項目が一貫して独立性が低い(24項目中22項目で有意)。

③ 特性; 人格特性の中では、明るさの項目で独立性の低いのが目立つ(18項目中15項目で有意)。

V 考 察

2変数間の連関性(独立性)の示す意味は極めて二面的であると考えなければならない。例えば、連関性が低い、即ち、互いに独立であるということは、一方では自分のアイデンティティが他者から理解されていないという、二者関係における一種の疎外状況の表われとみることもでき、また一方では他者に規定されることなく、自分なりに自己を対象化していることの証しであるとみることできる。換言すれば、連関係数とは二者の関係の良好性(理解—誤解)の指標でもありうるし、また二者の心理的結合度(依存—自立)の指標でもありうる。決して一義的に解釈することはできない。あまりに高い連関性にも、またあまりに低い連関性にも、同じように何らかの社会的不適応状態が推定されうる。恐らくは連関性と適応性との間には逆U字型の関数関係があると考えられる。この点の吟味を連関性の指標だけで明証的に行なうことは不可能で、個別的な次元での他方面からの検討を待たねばならない。もともと本稿での目的はまず青年期の自我の一般像を求めることにあり、ここではひとまず2変数間の独立性を、自他の不整合的關係、あるいは一歩進んで自己実現の過程での何らかの葛藤状態の

表われとみなして論を進めていくことにする。

1. 中学生

中学生における全般的な連関性の高さは、彼らの幻想系の中での自他の整合的關係を表わしている。母親も、友人も、教師も、各々彼らのアイデンティティの準拠棒として一定程度の機能を果していると思われる。明るくて比較的やさしいが、必ずしもまじめだとも頼もしいとも言えないという彼らのパーソナリティの一般的評価は、恐らく家庭や学校で得た判断基準に基づくものであろう。別の言い方をすれば、彼らは他者のまなざしの中以外に自己を見出すことができず、未だ他者との依存的關係の内にあると考えることができる。

2. 高校生

高校生以降になると、対象間の分化がかなり明確になってくる。彼らの場合、友人とは一貫して整合的關係にあるのに対し、母親や教師とはある程度距離をおき、違った観点から自己を対象化することができるようになってきている。母親や教師がもはや自己の準拠棒となりえてないということは、それらに代表される「おとな」の社会に対する高校生の不信感の表われとしてみることもできる。いずれにしろここに、現在の「受験勉強」を軸とした教育体制の中で、普通高校以上に二重に疎外された農業高校生の存在と、その思いがけず醒めた眼を見ることも可能であろう。

なお、比較的類似した対象間の分化の傾向は、高橋(1970)の「依存性」の研究の中にも読みとることができる。ただしそこでは、母親に関しては異なった傾向がみられるのだが。

3. 大学生

対象間の分化は、大学生ではM・IとM・M・Iレベルで異なった様相で現れる。それ故ここではまずパースペクティブレベルの問題から考察を進めていく。

直接的レベルからメタレベル、メタメタレベル……と自己の幻想系を螺旋状に辿っていくということは、意識の表層部から、より錯綜し未定型な部分へと掘り起していくということである。被験者の多くはこの質問紙に接するまでは、メタメタレベルの問いかけを自分に課した経験など殆んどないに等しいだろう。このような問いが重い意味をもってくるのは、他者との緊張關係の中で自我が崩壊の危機に曝され、他者存在に対する感受性が昂まった場合などに限られる。日常ではそれは殆んど意識化されることもなく、ただ漠とした翳りとして看過されているにすぎないであろう。IPM型質問紙とは、このような未だ形を成さない観念までもを触発し、意識の表

層まで導き出すためのものである。

ここで大学生の結果に帰ってみると、S・I—M・I關係ではここにきて初めて母親の4項目はすべて独立となってきた。彼らはもはや母親にどのように思われているかに関わりなく自己を対象化しているのである。これに対してS・I—M・M・I關係では再び連関性が高まってきている。これは即ち、上述の母親からの自立を母親自身も認識しているはずだと思っていることを意味している。

このようにより上位のレベルまで意識化することによって、青年期における母親の存在は、発達に伴って次第に「希薄化」していくというよりはむしろ背景へ「後退」していくものとして解すべきものだということが明らかになったと思われる。従ってひとたび自我が危機に瀕した場合、母親の存在は在青年期後期においても容易に意識上に再浮上してくる可能性がある。このような力動的關係はLaingの症例の中にもしばしば見かけられる。

大学生における教師の存在はこれとは対照的である。両者の關係は高校生において独立となったにも拘らず、大学生のメタレベルでは再び連関性が高くなっている。これは彼らが自己のアイデンティティの準拠棒として教師をみているにも拘らず、教師はそのことに気付いていないと思っていることを示していると思われる。このような群間の違いは、恐らく教師と教え子との關係が中学、高校と大学では異なっているためと考えられる。中、高校生にとっての教師は直接的で現実的な存在であるのに対し、大学生にとってはより間接的でイデアルなものとなる。教師に関する項目における群間の違いは、このような二者の關係性の違いの反映とみることができる。

なお、大学生における「頼もしさ」に対する極端な否定的自己評価(S・I)は、長島らの研究結果からは予想だにできなかったことである。これは10数年前との社会状況の違いを反映したものとみるべきだろうか。やさしくまじめで、頼りない存在とは、まさしく笠原(1977)の描く、現代のオブローモフ達の姿そのものではあるが。

VI 結 び

これまでの実証主義的、行動主義的心理學は、「自我」の問題を、それが必然的に意識の問題を孕むが故に、意識的に避けて通ってきたように思われる。たとえ「自我」をテーマとして取り挙げたものであっても、それが独立し完結した実体として扱われる限り、そこに「他者」の影を見出すことはできない(例えば

Waterbor, R., 1972.⁽⁸⁾を見よ)。

勿論、例えば「対人関係 (interpersonal relation)」の心理は社会心理学上の中心的なテーマとなっているが、そこでの他者は、Mead, G. H. のいう「一般化された他者 (generalized other)」、即ち「社会」ないしは「共同幻想」のことであって、それがリアリティを有するための必須の媒介である「対の関係」を通して捉えていくのでなければその意義は薄れるであろう。しかもその種の研究で描かれる力学とは、「社会→個」という一方向的なものが殆んどで、社会的に規定される個的存在の様態を記述するに留まっている感が強い。いずれにしろ、そこでは「自己と他者」は、「主体と客体」の二元論の中で「対象化」されたまま、決して互いに[・]出会うことではないであろう。本来、「自我」とは自他の「相互人格の関係 (interpersonal relation)」の中で捉えるべきものであって、無媒介的に「個」を「社会」に連続させることは、「個」の側のみでなく、かえって「社会」までも希薄化させることになりかねない。

本稿での試みは、上述の如き問題意識に立ちながらも、決してそれに十分に答ええたとはいえない。しかも、標本数の不足を含めて、方法論上の厳密さに欠けていると思われる点多々ある。しかしながら今回のアプローチが、青年期の自我の重層的構造を、日常的には意識化されない位相まで掘り起すことにより、そこでの他者の存在をある程度まで明らかにすることができたということではできよう。いずれにしろ、これはほんの発端にすぎず、より一層の深化が必要とされる。

参考文献及び注

- (1) Freud, S., 1940, *Abriss der psychoanalyse*, (古沢平作訳, 精神分析学概説。フロイト選集・15, 日本教文社)。
- (2) 森山公夫, 1975, 現代精神医学解体の論理, 岩崎学術出版。
- (3) 宇都宮芳明, 1978, 相互主体性とその世界, 講座現代の哲学・2, 人称的世界, 弘文堂。
- (4) Laing, R. D., & Cooper, D. G., 1964, *Reason and violence*, Tavistock. (足立和浩訳, 理性と暴力—サルトル哲学入門—, 番町書房)。Laing はこの概念をサルトルに拠っている。
- (5) 坂部恵, 1976, 仮面の解釈学, 東大出版。坂部は「*aliénation*」を「他有化, 他者化」と読ませている。
- (6) Laing, R. D., 1967, *The politics of experience and the bird of paradise*, Penguin Books. (笠原嘉, 塚本嘉壽訳, 経験の政治学, p. 76, みすず書房)
- (7) Laing (1966) はニーチェを引いて次のように述

べている。「ツェラトウストラにおいて、醜悪極まらない男は、その醜さの永遠の目撃者に耐えかねて神を殺し、それに代えて無を置く。」(p. 16)

- (8) 坂部恵, 前掲書, p. 82-83.
- (9) Laing, R. D., Philipson, H., & Lee, A. R., 1966, *Interpersonal perception—a theory and a method of research*, Tavistock.
- (10) Laing, R. D., 1960, *The divided self—an existential study in sanity and madness*, Tavistock. (阪本健二, 志貴春彦他訳, ひき裂かれた自己, みすず書房)
- (11) Dymond, R. F., 1949, A scale for the measurement of empathic ability, *J. Consul, Psychol*, 13, 127-133.
- (12) 長島貞夫, 藤原喜悦, 原野広太郎他, 1966, 自我と適応の関係についての研究(1)—Self-Differential 作製の試み—, 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-106.
- (13) 長島貞夫, 藤原喜悦, 原野広太郎他, 1967, 自我と適応の関係についての研究(2)—Self-Differential の作製—東教大教育学部紀要, 13, 59-84.
- (14) 本稿での、中学生に関する部分のデータは、筆者の指導の下に、山田美佐子氏が1976年度卒業論文のために行った調査に依っている。
- (15) 岩原信九郎, 1964, ノンパラメトリック法, 日本文化科学社。
- (16) 高橋恵子, 1970, 依存性の発達の研究; III—大学・高校生との比較における中学生女子の依存性—, 教心研, 18, 1-11.
- (17) 笠原嘉, 1977, 青年期—精神病理学から—, 中央公論社。
- (18) Waterbor, R., 1972, *Experiential bases of the sense of self, J. personality*, 40, 162-178.

(本稿の一部は、中国四国心理学会第33回大会において発表されたものである。)